

# 学生生活において自立を育むための支援

—カウンセリング室からアクションを起こす—

## Support for cherishing independence of my students in their school lives

—Take actions from my counseling room—

勝田 みな

Mina Katsuda

### 目次

- I. はじめに
- II. 研究の目的
- III. 研究の方法
- IV. 事例
  - 1. ケース A
  - 2. ケース B
- V. おわりに

### I. はじめに

「話すことができてよかったと思います」とカウンセリングを終えた学生が笑顔で話す。彼らが帰るときには足音が軽く聞こえ、後ろ姿を見送ると背中が笑っているようにも見える。このような学生の笑顔のために、筆者は子ども学科専門教科「生活」の担当であると同時に心理カウンセラーとして日々若者を指導、支援している。

小学校新学習指導要領（文部科学省 2008）では、生活科の目標を「具体的な活動や体験を通して、自然と身近な人々、社会及び自然とのかかわりに関心を持ち、自分自身や自分の生活について考えさせるとともに、その過程において生活上必要な習慣や技能を身につかせ、自立への基礎を養う」としている。

また、キャリア教育では、（文部科学省 2012）は、「子どもたちには将来、社会的・職業的に自立し、社会の中で自分の役割を果たしながら、自分らしい生き方を実現するための力が求められている」としている。

さらに、経済産業省（2006）は、「職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力として社会人基礎力『前に踏み出す力』『考え抜く力』『チームで働く

力』の3つの能力を意識的に育成していくことが重要になってきている」としている。

これは、卒業する学生を、就職先に送り出せばよいという考え方ではなく、学生が卒業、就職、そしてその先のキャリアを見据えた考え方のもとに、学生生活の中で身につけてほしい力である。

これらの3つの能力は学生が幼保小期にどのような環境で過ごし、園や学校、保護者等がどのようにかかわってきたのかなどが影響している。自立できない学生たちの中には、この時期に「自立の基礎」を身につけられなかった何らかの原因があったのではないかと推測される。

## II. 研究の目的

本研究の目的は、学生自身が日々生活の中でアクションを起こすことにより、幼保小期に育むことができなかった自立が生まれ、自己肯定感を持つことができるだろうという考えのもとでの支援についてである。

國分（1996）は「カウンセリングは『行動の変容』を目標にする」と述べ、「カウンセリングとは言語および非言語的コミュニケーションを通して、行動の変容を試みる人間関係である」と話している。この目的達成のため、幼保小期の環境や家族関係がどのように影響し、コミュニケーションが取りづらいと言われる学生に対し、カウンセリングを通してどのように救うことができるのかを考えていく。

## III. 研究の方法

### 1. 対象

20代男女を対象に行った。職業などは様々で、本研究では学生が中心である。

### 2. 期間

約2年間にわたり個人カウンセリングを行った。1回のカウンセリング時間は50分間である。カウンセリング回数は継続して行う場合もあれば、1回で終了する場合もある。

### 3. 方法

本研究ではケースAとケースBに分ける。それぞれのケースでは事実を選択して組み合わせたものであり、個人を特定するものではない。類似のタイプを複数組み合わせるケース記録を作成した。國分（1995）は、「一つや二つの事例から母集団の特質を推論する危険」について述べている。そのため複数以上の事例をもとに全体の傾向をつかむようにした。

カウンセリングの流れは國分（1996）が示す「コーヒーカップのようなもの」で、面接の初期（本研究では第1期）「リレーションをつくる」・中期（第2期）「問題をつかむ」・後期（第3期）「問題を解決する」の3つに分けられる。

#### 4. 倫理的配慮

本文中の事例はカウンセリング内容を一般化したものであり、研究対象者の「個人」は特定しない。

### IV. 事例

#### 1. ケース A

ケース A の特徴は、「自分のやりたいことが分からず、いつも気持ちが不安定」な事例である。小学校入学時から友だちができず一人で過ごすことが多く、人前で話すことが苦手だった。中学校から不登校になった。

家庭環境は、父親の仕事がうまくいかなくなってから大きく変わってしまい、祖父母と父母の仲が悪くなり、家族間での会話が少なくなった。

##### (1) 経過

カウンセリングを始めてから全 32 回の経過を 3 期に分け報告する。

##### ・第1期「リレーションをつくる」 初回～3 回目（2 か月間）

初回は養護教諭に促されて来室した。「ただ、何となく過ぎていく毎日、だらだらしている毎日、こんな繰り返しの毎日をなんとかしたい」と話した。

筆者は、当初 A の話を傾聴に徹した。ごく普通のラフな服装で化粧っ気はなく、表情に乏しく目を合わせなかった。礼儀正しく挨拶はできた。4 月から養護教諭に相談をしていたこともあり、現在の自分の思いを淡々と話した。中学校からは、不安定な毎日を送ってきた。大学進学をきっかけに無遅刻・無欠席で通いたいと決意をしたので何とか頑張りたいという気持ちを受容した。「小さな目標で良いから行動できそうなことを一緒に考えていこう」と話した。受け答えは「確かに」「なるほど」と繰り返した。

初回の感想を聞くと「まあ、カウンセリングって、こういうものでしょう」と、カウンセリング慣れしているような感想を話した。カウンセリングを受けたところで大きな進展はないと思っている態度であった。

##### ・第2期「問題をつかむ」 4 回目～24 回目（約 7 か月間）

相変わらずだらだら過ごす毎日が続いた。アルバイトやボランティア活動を行う気持ちにはなれない。サークル活動にも今のところ参加する気持ちにはなれない。自分の生活リズムが狂うのが嫌なのでできないと思っている。また、アトピー性皮膚炎に小学校の頃か

ら悩まされてきたが、ここ1か月ほど前から肌がひどく荒れ、皮膚科にかかる原因は「ストレス」と診断され納得している。

Aが大学進学を決めたのは、自分の趣味について学べることだった。「中学の不登校時代に、とても良い香りに包まれた室内でカウンセリングを受けたことが印象的で、当時は将来このような環境で働きたいと思っていたが、今は将来のことまで考える余裕がない」、「学生生活をどう過ごしていけば楽しいと思えるような毎日になるのか、そのことをまず解決したい」という気持ちが大きかった。

筆者はAの気持ちを受容・共感で常に受け止めてきたが、ただ話を聴くだけにとどまらず、自立心を身につけさせるために、発言の中で前向きなものについては「社会人基礎力」の「前に踏み出す力」（経済産業省2006）を身につけさせようと考えた。例えば、趣味の話題から、気持ちが落ち着く時の心の持ち方を明確にさせたり、逆に落ち着かない時はどんな場面なのかマイナス面を感じさせたりして、人や環境への対応の仕方を考えていった。

そこで趣味を楽しむだけでなく、「検定試験にチャレンジするなど目標を掲げてみるのはどうだろう」と提案してみた。検定を受けるということは社会とのかかわりが出てくる。受検会場が一般の人と同じ場合、多くの人が同じ目標に向かって取り組んでいるのだと感じること、一斉に試験を受ける会場の雰囲気などを体感することが重要である。また、検定が不合格の場合、失敗しても粘り強く取り組むことの大切さは身をもって感じることで、現状を分析して目的を明らかにする力も身につく。

この時期は、高校生時の楽しかった話や大学生活について思うことを饒舌に笑顔で話した。また、「幼稚園までは男の子と遊ぶ毎日でけがが絶えなかった。幼稚園から習い事をしていたがあまり好きではなかった」、「当時、父親は海外出張が多く欧米の土産を買ってきてくれた。その後、父親の会社の経営がうまくいかなかった頃から祖父母と父母の仲が悪くなってきた」、「小学校では、同じ幼稚園に通っていた友だちがいなかったことでクラスになじめなかった」、「人前で話すことが嫌いでクラス全員の前で号令を掛けるさえも嫌でたまらなかった」など、子どもの頃の話をよくしてくれた。

後期が始まったが、落ち着かずイライラしていて、「何をしても今一つ打ち解けられず楽しくない。学祭で模擬店を出店するのだが担当が嫌でたまらない」、「ゼミの先生に学祭での担当について相談すると、『Aのやりやすい方法でいい』と言われ安心した」と、話していた。Aの許可を得てゼミ担当者とは今までのカウンセリングの様子は伝えてあった。学校生活の中で具体的な活動を行う場合には他の教職員との連携は不可欠であることは今回の学祭におけることから理解できる。

ある日、「こうして話を聴いてもらえて気持ちが楽になったので少し自分でやれそうな気持ちになってきた。しばらく自分でやってみるのでカウンセリングを休む」と言ってきた。その気持ちを尊重し、自分でやってみるといっても無理は禁物なのでいつでもカウ

セリングに来て良いことをしっかりと伝えた。

約1か月後、「やはり予約を入れてカウンセリングをしないと、なかなか自分をコントロールできない」と来室した。定期的にカウンセリングを受けたいと今まで以上に実感し、筆者に対しての信頼感も回を重ねるごとに増し、今まで人に話したことがないような深い内容までを話した。

大学では華道サークルに入った。花を通して他の部員の様子や花についての知識が広がり癒しを求めている自分自身を知ることになった。検定については受けられるものはチャレンジした。行動した点を褒め、「受からなくても自分の力になっている」と励ました。

就職活動についての悩みもカウンセリングの中に出てくるようになった。「面接」「履歴書」「自己PR」などのことばを聞くだけでパニックになってしまった。筆者はキャリア・コンサルタントの資格も取得しているが、就職についての話題では、ゼミ担当者やキャリアセンター担当者と連携を取るようにした。

#### ・第3期「問題を解決する」 25回目～32回目終結（2か月間）

ゼミ担当者から突然、「模擬面接をします」と言われパニックになる。普段から予期しないことでよくパニックになり落ち込む。予想通り模擬面接は全く話せなかった。ゼミ担当者とキャリアセンター担当者とは連携を取ってきていたが、就職活動が始まった12月からはよりいっそう連携を強化することにした。

後期から「ゼミが楽しくなった」そうで、検定を進んで受けたり、華道サークルに入ったり、アルバイトまで始めたりと、明るく前向きな学生生活を送っていた。趣味の菓子作りも毎週行うようになり、家族や友人に振る舞った。

冬休みにパン屋でのアルバイトを見つけてきた。菓子作りが好きだからパン作りにも興味はあり採用試験を受けに行き、晴れて合格した。フリーペーパーで見つけ、店の見学をしたり電話連絡をしたり、自分で考えて行動できるようになった。その行動力がアルバイト採用につながったことを褒めた。

最後のカウンセリングでは、入学時に立てた目標がかなわなくなったことを話した。悔しい気持ちを共感し、「新学年で新しい目標を立てればよい」と話した。また、「大学での目標に限らず、もっと広い視野で楽しいなと感じられる目標を考える方がワクワクしてくる。このワクワク感を大切にするように」と伝えた。

カウンセリングは学年の区切りで終結した。A自身、自分が変わったと話してくれた。明るくなりよく笑うようになった。また、行動的にもなれた。家族や友人からも「明るくなった」と言われ、前向きな変化を実感している。

## (2) 考察

ケースAの場合は、中学校の頃からカウンセリングにある程度慣れていたので、初対面の筆者に対しても自分の思っていることを話すことができた。また、受け答えが「確か

に「なるほど」といった表面的な返事が多いのは、口癖かもしれないが自分の心に深く侵入してほしいという抵抗も感じられた。

第1期は、信頼関係の構築を行い、カウンセリング室が安全で安心な場所であることを伝えた。今後は必要に応じて養護教諭や他の教職員に学校生活での協力を得るためにAの話をしていきたいと思っていること、もし、他の教職員に話す場合は「○○について話そうと思うがどうだろう」とAの許可を受けることを確認した。

第2期は、興味のある話題では前向きな様子が出てきた。その時はコーチングやアサーションを取り入れてカウンセリングを行った。しかし、もともとメンタル面の問題を抱えているので、常に、「相手の気持ちを理解することが大切だ。気持ちを分かちあえること。それが、カウンセリング・マインドだ」と諸富（1999）が述べているように、メンタル面の問題になった場合は「とにかく黙って話を聴くこと、相手の辛さを受け止めること（諸富1999）」に徹した。

小学校低学年に祖父母と両親との確執のため、自分の生活に影響が出ていた。それは、学校で一人ポツンとしていたという状況からも理解できる。平松（1996）は「子どもの症状や問題行動は、結局は家族関係の歪みから起こったのではないかと考えられる」と述べている。そのことが、現在の「自分のやりたいことが分からず気持ちが不安定」という状態にも表れている。

低学年での学校生活を聴いてみると、授業中や当番活動、放課などの様子から教師が気付くことは何かなかったのだろうかと感じた。例えば、放課や体験活動では個々の人間関係がよく分かるはずである。諸富（1999）は「子どもの人間関係能力は基本的には子ども同士の関係のなかで自ずと学ばれていくものである」と言い、「人間関係は無駄な時間につくられる」と述べている。また、「不登校になった子どもたちは『人間関係で不適應』を起こしている姿であり、不登校になった子どもたちは、内向的で几帳面、神経質、心配性、依存的といった性格上の特長のある子どもが多い。自分の思ったことをストレートに口に出せず、友人や教師との関係においても緊張しやすく、傷つきやすい。いつもどこか不安を抱えている。」と述べている。Aにとって、この時期に「自立への基礎を養う」ことが困難な状況であったと考える。

後期に入ってから、自立を自分で確かめるような言動で「自分でやってみる」と宣言し約1か月間自分で考え自分で行動を試みた。再びカウンセリングに戻ってくる結果となったのだが、戻って来られる場所を感じていたのは今までのカウンセリング内での信頼関係の密度の濃さ深さに関係しているからであると言える。

第3期は、「アルバイトを行いたい」と社会とのつながりを感じアクションを起こしたことにより、自分自身の変化を感得することができた。周囲からも性格が変わった、行動的になった、アルバイトを始めたなど変化に気付き、Aを認めた。

就職活動では突然の出来事にパニックになることが多かったがしっかりと傾聴を行い、

気持ちを受け止めてから、人とのかかわり方をその都度教えた。河村（2005）は「対人関係を良好にする技術はソーシャル・スキルをみがくこと」であり、「相手を理解し、自分の思いや考えを適切に相手に伝えることがソーシャル・スキルである」と述べている。また、就職活動について國分（1994）は「学校カウンセリングは開発的カウンセリング（育てるカウンセリング）の方法を提唱していく必要があり、キャリア・ガイダンスが強調したい具体案のひとつ目である」と述べているようにキャリアに関しての支援も必要に応じて行った。目標を持たせることとその目標に向かって目の前の小さな目的を掲げ、どのように行動するとよいのか考えさせることも行った。

ケース A では、養護教諭や他の教職員と連携を取りながら支援を行うことができ、A 自身も周囲にタイミングよく認められることにより、小さな自信が数多く身につけていった。この連携が、A の変化の要因のひとつになっていると考えられる。

## 2. ケース B

ケース B の特徴は、「人とのかかわり方を身につけ、気の合う人と仲良くなりたい」という事例である。両親が共働きなので 0 歳から保育所に預けられていた。小学校低学年から勉強が嫌いで授業中に指名されて答えられないこともありいじめを受けた。

両親は仕事が忙しく、休日も一人で過ごすことが多かった。小学生の頃から両親の仲が悪く、特に母親から愚痴をいつも聞かされていた。

### (1) 経過

カウンセリングを始めてから全 20 回の経過を 3 期に分けて報告する。

#### ・第 1 期「リレーションをつくる」 初回～2 回目（約 1 か月間）

初回は「カウンセリングについてのお知らせ」というチラシを見て来室し、話したいことが明確にあった。おとなしく表情がほとんどないが、ファッションに興味がある。また、文字がきれいで読みやすく、言葉遣いも丁寧である。ただ、他の人にカウンセリングを受けていることは知られたくないので人目を避けて来室し、カウンセリングを受けていることは内緒にしてほしいとのことであった。

四年制大学を卒業してからの入学なので同級生は 4 歳年下になるため、友人を作りたいとは思っていないが、人が自分をどう見ているのかが気になっていた。人と上手にかかわることができないが誘ってもらえるとうれしいので声をかけてもらうのを待っている。つまらない話を周りがしていてもつい「うん」とうなずいて聞いてしまう。時々、意見を求められるので思い切って意見を出すのが反対されると否定された感じになる。

信頼関係を深めるために、傾聴、受容と共感で気持ちを受け止めた。「就職を始めとする将来について一緒に考えていこう」とカウンセリングをスタートさせた。

「就職を決めたいがどう動いていけばいいのか分からない」と話し、長年学んだことを

活かせる仕事が本当にあるのかどうかとても不安を持っている。就職活動に関して具体的な支援は筆者だけでは難しいため、キャリアセンターへの相談の必要性も出てくるだろうから「他の教職員と連携を取って支援を行いたい」と提案したが、「誰にも言ってほしくない」という返事だった。他の教職員との連携をBが許可するまでは筆者だけで対応することにした。

・第2期「問題をつかむ」 3回目～10回目（4か月間）

一見目立つようなタイプではないが、個性が出るような服装で毎回来室した。いつもファッションのポイントを聞き、髪形からアクセサリ、靴までトータルに気を遣っている点を褒めた。

アルバイトは和菓子屋で1年以上働いている。アルバイトの中でもリーダー格でシフトを任せ毎月調整を行っている。ファッションに興味があるため本当は服屋でアルバイトを行いたい。思い切って応募してみたが残念ながら不採用だった。「アルバイトに落ちるなら就職は無理だ」と言って涙を流す。

「話したいことがある」と対人面で小学校の頃から上手に人とかかわれないことについて、「低学年から勉強が嫌いで成績も悪かったが、周りも自分と同じぐらいの成績だと思い込んでいた」、「授業内容は低学年からよく分からず難しかった。勉強が分からないことからいじめられたこともあった」、「その後、自分なりに勉強を頑張ったが、このような経験から他人に気を遣いすぎてしまい、人目を気にしながら生活してきた」、「周りが自分のことをどう思っているのか本心が知りたいし、心の奥底では友人と深く気兼ねなくかかわりたい」と、涙を流しながら話した。

母親にはこのような話をしてしたが、学校の先生や友人には話せず、今回、初めて話せた。話した直後はスッキリした感じだったが、少し時間が経つとまずいことを言ってしまったのかもしれない、こんなことを話すと変な子だと思われるのではないかなど、悪い方へ思いを巡らしてしまった。とても大事な話を筆者だけに話してくれたことに感謝を伝え、Bの気持ちをしっかりと受容し温かい気持ちで寄り添った。

夏休みに母親から「介護の仕事に就いてみないか」と言われた。できれば今まで学んだことを活かせる仕事に就きたいし、興味のあるファッション関係の仕事に就きたいのだが、普通の人よりも長く学生生活を送ることができたのも両親のおかげなので、介護の分野も選択肢の一つにして考えることにした。小さい頃から人とのかわりに苦労しているが、接客の仕事をしたという気持ちもある。しかし、人間関係ですぐに気まずくなるのではないかという不安も強い。

他学部教員からBが積極的に明るくてきばきと手伝いをしてくれたことを聞き、Bを褒めるとすごく照れた。「褒められた経験がないので、どういう表情をしたらいいのか分からない」そうだ。

・第3期「問題を解決する」 11回目～20回目終結（3か月間）



母親から勧められた介護職については近所の施設へ見学に行き、施設の人から仕事内容の説明を聞いた。大変な仕事で、きちんと介護について学んでいない人間が簡単に飛び込んでしまっただけでは利用者や施設スタッフに迷惑をかけてしまうと思い、断念した。

ファッション関係の会社へ応募しているが、書類で落ちたり、面接の1回目で落ちたりするなど思うように進まず、就職活動は停滞している。何とかしなければという思いは強い。ゼミ担当者やキャリアセンターで相談をするように促すが、自分から積極的に聞きに行くことはしない。

年が明け、今までとは雰囲気の違いエLEGANTな装いで、ヘアスタイルも変えて来室した。母親が作ったという帽子やマフラーを身につけている。最近、はやっている断舍離をやってみて気持ちがスッキリとした。

人と楽しく過ごすために仲間に入りたいが入れないという気持ちがこの頃また強くなってきた。「どうしたら気の合う人と出会えて楽しくかかわれるのだろうか……どうしたらいいのですか？」と質問してくる。第1期の時と同じような悩みを話し、気持ちが不安定である。

Bは、小学校低学年の頃から両親の悩みや愚痴を聞かされていた。特に母親が、父親との父親の実家のことでいつも嫌な思いをしている話を我慢しながら聞き続けてきた。年齢が上がるにつれて両親からの愚痴がエスカレートし、母親からはほとんど毎日聞かされ不愉快な日を送っていた。

長期休みに入るため、20回目でカウンセリングは終了した。最終日の前日、髪を切り染め、髪の毛が顔にかからないようなヘアスタイルで顔を出した。メイクも明るい色を入れ洋服も明るい色であった。自分から楽しく過ごしたいと気分転換をしたのだ。まだ、就職先は決定していないがあきらめずにチャレンジしている。「ファッション関係の仕事では同年代の洋服販売にこだわらず見つけるように」と助言した。

## (2) 考察

ケースBの場合は、小学校低学年から両親の愚痴を聞かされ、それをじっと我慢していた。いわゆる「よい子」にならなければと強迫観念を感じつつ、親の期待に応えようと頑張ってきた。Bの両親には、「人間は互いに支えあう存在である」（諸富1999）という思いはなかった。そのため両親は、お互いに責めあうことにより、子どもに安心感を持たせることができなかった。また、Bは他人に気を遣いすぎてしまい、人目を気にしながら生活してきた。カウンセリングが終わりに近づいても「どうしたら気の合う人と出会えて楽しくかかわれるのだろうか、どうしたらいいのですか？」という不安定な気持ちが続いた。成人しても、小学校低学年の頃と同様に自信のなさが続いており、自立することへの不安が常につきまとっている。

カウンセリングが始まった頃は表情が乏しく目を合わせることもなく、筆者が何か話し

でも否定し素直さが感じられなかったが、それは普段相手から受けることをそのまま表現していたのだった。

回数が進むにつれ、今まで人に話せなかったことを話したり、ファッションへのこだわりを自分なりに楽しんだりするなど、自分を表現することができるようになってきた。「人とかかわり方が下手だ」と言いながらも、ファッションをとおして自分自身を表現できるようになり「社会との接触」を意識している。人とかかわり方も自分がやれること、自分の苦手なタイプを知ることを一緒に考え、支援を続けてきた。

ケース B の場合、B の拒否により、他の教職員との連携が全く取れなかった。連携不足が原因の一つとなり、カウンセリング終結までに就職内定が決まらなかったのは残念だった。「どんな将来を生きたいのか」、「自分は人の役に立っている、力になれる」ということを第 2 期の後半から、筆者の考えということで話すことができたなら、深い内容にかかわるカウンセリングもでき、自立を育む「前に踏み出す力」についての話し合いができたかもしれない。そう感じるのは、他の人には話してほしくないという B からの要望を守り続けた筆者に対しての信頼関係が強固だったことから言える。傾聴に終始するだけではなく具体的な行動に向けての話し合いが可能であったと考えられるからである。

## V. おわりに

### (1) カウンセリングについて

カウンセリングは予約を入れることになっているが、事前に予約を入れることができなかった場合に対しても、カウンセリングを行えるよう柔軟な対応を行っている。

カウンセリングの内容はメンタル面がほとんどであるが、何らかの症状や問題によっては専門医の診断が必要とカウンセラーが考えた場合、適切で必要なリファーを行っている。これは、カウンセラー業務を放棄することではない。カウンセラーが自己の能力の範囲を超えて支援をすることはクライアントおよび周囲の人々の信頼を失うことにもつながるので、自分自身の行動・言動に責任を持つために関連機関と連携することが重要だと考える。

筆者は心理カウンセラーの資格の他、小・中学校教員免許、教育カウンセラー、キャリア・コンサルタント等の資格も取得しているので、学校教育相談、就職や将来に関するキャリア相談なども必要に応じて対応している。これまで、学生の自立を育てるための支援では、一人ひとりに合った支援の方法を見つけ、親身になって向き合ってきた。

新学習指導要領（2008）小学校生活科の目標や内容の中で「気付く」という言葉はよく使用されている。中でも第 1 学年及び第 2 学年目標（3）「身近な人々、社会及び自然とかかわりを深めることを通して自分のよさや可能性に気づき、意欲と自信をもって生活することができるようにする」とある。この「気付く」という点が自立への基礎を養うことになる。カウンセリングにおいても同様に「気付く」ことが重要であり、特にまだはつき

りと気付いていないが薄々気付いていることをカウンセラーが意識化させ（國分 1996）、はっきりと理解するのを助けるために明確化すること（武田 1996）によって「気付く」体験が可能である。

「気付く」ことにより生きる目的を見つけ、カウンセリングを通して前向きなアクションを起こすことができ、学生の自立を育む支援を今後も行いたい。

## (2) 今後の課題

本研究において、幼保小期の家族関係や友人関係が自立を育むうえで多大な影響していることが明らかになった。これらの人間関係を築く力は、家族だけでなく、園・学校や地域においても育まれる。諸富（1999）は「子どもの人間関係を育む学校は、まず、教師同士の心のつながりを大切にしてほしい。教師同士の関係が学校の雰囲気をつくるし、それが子どもたちにも伝わるからである」と述べている。

また、野田（2008）は「自立への基礎を養うことは生活科の目標であり、三つの側面がある」と述べ、「①学習上の自立、②生活上の自立、③精神的な自立の三つの基礎は互いに支え合い補い合いながら豊かな生活を生み出していくことに役立てられる。子どもの実態、保護者の願いや地域の要望などを踏まえて明確にしていく必要がある」と述べている。

今後の課題として「安心して人間関係を築き自立の基礎を身につけさせる為に、教師やカウンセラーができることは何か」をさらに追及していきたい。

## 引用文献

文部科学省（2012）「キャリア教育」

[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/career/index.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/career/index.htm) 2012. 12. 20

経済産業省（2006）「社会人基礎力」

文部科学省（2008）「新学習指導要領・生活」

國分康孝（1996）「カウンセリング技法」（誠信書房）p. 4, 6,

平松清志・藤井和郎（1996）「学校教育相談の新しい試み」（明治図書）p. 147

諸富祥彦（1999）「こころの教育の進め方」（教育開発研究所）p. 128, pp. 161-162, pp. 181-182, p. 185

河村茂雄（2005）「教師のためのソーシャル・スキル」（誠信書房）pp. 3-5

國分康孝（1994）雑誌「こころの科学 58号」（日本評論社）p. 15

武田 建（1996）「カウンセリングの進め方」（誠信書房）pp. 227-228

野田敦敬（2008）「小学校学習指導要領の解説と展開 生活編」（教育出版）p. 19